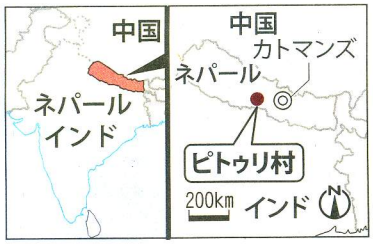
日　新　聞　【新聞定価1ヵ月3,925円(本体3,738円)】1部売り(消費税込み)朝刊130円 夕刊50円　〔第3種郵便物認可〕

日本の父 今も心に

愛の手の子たち 上
～ネパールからの報告

手足に障害の少女 夢かなえ教師



泥水が流れる悪路を車が水しぶきを上げて進む。長い雨期に入ったネパール西部のピトゥリ村。フルマヤさん(24)は古びた小学校の教室にいた。

生まれつきの障害で手足の成長が止まり、自力では立てない。そんな彼女が昨年8月、母校の教師になった。失業率が40%を超え、最貧国の一つとされる国で、障害者が職を得るのは容易ではない。

「学んだことを仕事に生かしたかった。子どもたちは最初、私の姿を見て怖がっていましたが、今はとても懐いてくれます」。閉じこもりがちだった彼女を後押ししたのは、同じく障害を抱えた一人の日本人だった。

◇

ピトゥリ村から約5000キロ離れた大阪府寝屋川市に住む大貫明子さん(82)。夫正之さんは2007年7月、82歳で他界した。仏壇のそばには、正之さんの遺影とフルマヤさんの写真が並ぶ。「彼女の成長を見守ることができて、主人は本当に幸せでした」。明子さんが教えてくれた。

故大貫正之さん

正之さんは48歳の時、自転車で帰宅中に対向車をよけようとして転倒。頸椎骨折で首から上と右手の指3本しか動かなくなった。子ども2人が独立し、リハビリ生活を続けていた1999年、アジアの国々で里親活動に取り組む公益社団法人「アジア協会アジア友の会」(大阪市)を通じ、当時11歳だったフルマヤさんの精神里親になった。割りばしでワープロのキーボードを押して手紙を書き、家計をやりくりして年2万円の就学支援金を送り続けた。

「大人になって世の中を広く大きな心で見られるように、勉強は大切です。賢いあなたのことだから、きっとそのような人に育ってくれると期待しています」。手紙には、いつも励ましの言葉が並んでいた。アジア協会のスタッフが翻訳し、フルマヤさんは成績や村の季節の移ろいなどを返事にしたためた。「今でも大貫さんの手紙を読み返すんです。気持ちが落ち着き、前向きになれるから」

村はヒマラヤ山脈の雪解け水が流れる大河のほとりにあり、時に野生のサイも現れる。学校まで約1キロの道は未舗装で車椅子が使えず、姉レカさん(28)が自転車で送り迎えする。家ではめいっ子に勉強を教えている。大貫さん夫婦の支えで入学した大学は通学上の問題で休学中だが、母校に採用された。「諦めずに卒業したい」と今も勉強中だ。

教室ではフルマヤさんを囲むように、子どもたちが教科書を広げ、アルファベットの復唱を始めた。授業が終わるとレカさんが迎えに来た。この日は雨で道が冠水するため、おんぶして帰るという。帰り道、フルマヤさんは言った。「今があるのは大貫さんのおかげ。日本のお父さんは心の中で生き続けています」

◆

2002年1月に毎日新聞大阪版などで始まった「あなたの愛の手を～海を越えて」が8月6日、連載500回を迎える。さまざまな理由で就学が困難な子どもたちの「精神里親」を紙上で募り、ネパールにも日本から多くの「愛の手」が届けられた。善意を糧に、現地で生きる人々の姿を紹介する。【重石岳史】

寝たきり「里親」の支援に感謝

姉のレカさん(中央)に背負われ、教え子らと下校するフルマヤさん＝ネパール西部のピトゥリ村で、重石岳史撮影

精神里親運動

海外の子どもを「精神里子」とし、「精神里親」となって支える運動。現地に教育支援費を送り、文通を通して物心ともに支援する。子どもたちは毎週1回、毎日新聞大阪版などで紹介し、精神里親を募っている。